

■ PCN だより

PCN Volume 68, Number 8 の紹介

2014年8月発行のPsychiatry and Clinical Neurosciences (PCN) Vol. 68, No. 8には、PCN Frontier Reviewが1本、Regular Articlesが6本掲載されている。今回はこの中より海外から投稿された5本の内容と、日本国内からの論文については、著者をお願いして日本語抄録をいただき紹介する。

(海外からの投稿)

Regular Articles

1. Vagus nerve stimulation therapy in treatment-resistant depression : A series report

G. Tisi, A. Franzini, G. Messina, M. Savino and O. Gambini

Department of Psychiatry, University of Milan, Milan, Italy

治療抵抗性うつ病における迷走神経刺激：シリーズ報告

【目的】本研究の目的は、治療抵抗性うつ病 (TRD) の1つの治療選択肢としての迷走神経刺激法 (VNS) の有効性を評価することであり、追跡期間はVNS手術後1, 3, および5年であった。【方法】単極性TRDの連続患者27例について調査した。21項目Hamilton Rating Scale for Depression (HAM-D 21) を用いて、うつ症状をベースライン時と手術後の追跡時に評価した。【結果】術前の平均HAM-Dスコアは25.6点であった。処置の1年後に22例について調査し、HAM-Dスコアの平均改善量は10.3点であった。患者5例 (20%) が1年後に完全寛解 (HAM-D<7点) に至り、6例 (22.3%) がレスポnderと判定され (HAM-Dスコアの50%低減)、8例ではスコアの低下量が20%未満であった。24~36ヵ月後に患者19例について調べたところ、HAM-Dスコアの平均改善量は12.1点 (47.2%) であった。1例が完全寛解に至り、8例 (42.1%) がレスポnderであった。本執筆時点までに、7例の患者が手術から48~60ヵ月後に再評価を受

け、スコアの平均低下量は14.2点であった。さらに2例の患者で完全寛解が得られたが、7例中4例については、前回の追跡評価時と比較して何ら改善を示さなかった。【結論】VNSうつ病治療法はTRD患者の20%で奏効した。しかし、一部の患者では、症状改善や寛解を達成するのに何ヵ月かを要した。それでもなお、この処置はTRDの有用な治療選択肢の1つと考えることができる。

2. Impairment on theory of mind and empathy in patients with stroke

Z-T. Yeh and C-F. Tsai

Department of Clinical Psychology, Fu Jen Catholic University, Taipei, Taiwan

脳卒中患者における心の理論と共感の障害

【目的】脳卒中後の患者では社会機能に障害が生じることが記述されている。本研究は、脳卒中患者における他者の精神状態を推論する能力、すなわち認知的・情動的心の理論の障害、および共感の障害の程度について検討するようデザインされた。【方法】言語的/非言語的心の理論と共感について調べる課題を実施して、脳卒中患者34名を、40名の対照被験者と比較した。【結果】得られた結果から、脳卒中患者では、認知と情動の両面での心の理論が有意に障害されており、この結果は、基本的な認知機能や情動処理について制御した後でも維持されることがわかった。右半球脳卒中の患者の方が、左半球脳卒中と比較して、非言語的心の理論の認知コンポーネントの成績が不良であった。認知的共感サブスケールでは、右半球脳卒中患者群の方が対照群と比較して他者視点取得 (perspective-taking) の成績が不良であった。【結論】右半球は、非言語的の手がかりを解釈して他者の心を推論すること、および共感の処理、とりわけ他者視点取得能力に関して重要な役割を果たしているものと考えられる。

3. Patient and family factors associated with family accommodation in obsessive-compulsive disorder

J. B. Gomes, B. Van Noppen, M. Pato, D. T. Braga, E. Meyer, C. F. Bortonceo and A. V. Cordioli

Anxiety Disorders Program, Department of Psychiatry, Federal University of Rio Grande do Sul, Porto Alegre, Brazil

強迫性障害における family accommodation と関連する患者および家族の因子

【目的】強迫性障害 (OCD) では、家族成員が個人および家族の習慣的行動を変化させ、儀式行為への参加や再保証の提供を余儀なくされるため、家族の機能は影響を受ける。これらの行動は family accommodation (FA; 家族の巻き込まれ) としてまとめられるが、この現象を見過ごす、OCD の症状を促進させ、予後不良を招くおそれがある。FA は治療成果の予測因子であると考えられているので、われわれは、外来患者を対象に FA の有症率について調べ、FA と関連性のある患者ならびに家族の社会人口統計変数や臨床変数を特定した。【方法】本研究には被験者 228 名が参加した。すなわち、OCD 患者 114 名と家族 114 名であり、患者が 12 セッションからなる集団的な認知行動療法プログラムに参加する以前に調査した。多変量線形回帰モデルを用いて、交絡因子を制御し、FA と独立の相関関係のある変数を評価した。FA については、Family Accommodation Scale for Obsessive-Compulsive Disorder—Interviewer Rated を用いて評価した。【結果】家族成員に FA の有症率が高いことがわかった。FA と正の相関関係を有していた 2 つの患者因子は、Clinical Global Impressions Scale で調べた OCD の重症度、ならびに Obsessive-Compulsive Inventory—Revised の強迫観念スコアが高値であることであった。FA と負の相関関係のあった家族特性は、Obsessive-Compulsive Inventory—Revised の溜め込みサブスケールのスコアが高値であることと、患者の配偶者であることであった。【結論】われわれの得た知見からは、FA を低減することを目的とした介入で効果が得られる可能性のある患者や家族を早期に特定することで、治療成果を改善できることが示唆される。

4. Reduced daytime intramuscular blood flow in patients with restless legs syndrome/Willis-Ekbom disease

E. Oskarsson, B. Wåhlin-Larsson and J. Ulfberg
School of Health and Medical Sciences, Örebro University

むずむず脚症候群/Willis-Ekbom 病患者では、昼間に筋肉内血流量が低下する

【目的】本研究の目的は、特発性むずむず脚症候群 (RLS)/Willis-Ekbom 病の女性患者における下肢の微小循環障害の徴候を検討することである。【方法】本研究は女性患者 8 例で実施した。平均年齢 48 歳 (範囲 21~65 歳) で、特発性 RLS と診断され、その他の点では健康な患者であった。平均年齢 47 歳 (範囲 27~64 歳) の健常女性対照被験者も本研究に含めた。前脛骨筋の筋腹にオプティカル・シングル・ファイバーを刺入し、レーザー・ドプラー・フローメトリー法を用いて筋肉内血流量を測定した。本研究は、午前 8~10 時までの間と午後 8~10 時までの間に実施した。血流量は perfusion unit (相対単位) で表現した。【結果】RLS 患者の両脚から測定した前脛骨筋の筋肉内血流量 (中央値) は、朝には 17.9 perfusion unit と、夕の 12.1 perfusion unit よりも有意に高かった ($P=0.004$)。健常者におけるそれらに対応する値は、13.1 perfusion unit と 12.0 perfusion unit であり、2 つの値に有意差はなかった。年齢をマッチさせた健常者と比較した RLS 群での微小循環の相対的変化倍率は、それぞれ 0.7 ± 0.3 と 1.1 ± 0.6 であった ($P=0.04$)。【結論】われわれの得た結果から、特発性 RLS の女性患者における前脛骨筋の微小循環は、朝の方が夕と比較して高いことが示唆される。

5. Do patients of delirium have catatonic features? An exploratory study

S. Grover, A. Ghosh and D. Ghormode

Department of Psychiatry, Postgraduate Institute of Medical Education & Research, Chandigarh, India

せん妄患者はカタトニアの特徴を有するか? 探索的研究

【目的】本研究の目的は、せん妄患者において Bush

Francis Catatonia Rating Scale (BFCRS) を用いてカタトニア症状の有症率を明らかにすること、および、せん妄患者において Bush Francis Catatonia Screening Instrument ならびに DSM-5 判定基準で定義されるカタトニアの有症率を評価することである。【方法】せん妄の連続患者 205 例を Delirium Rating Scale—98 年改訂版、改訂 Delirium Motor Symptom Scale、および BFCRS で評価した。【結果】BFCRS では被験者の 5 分の 2 ($n=80$; 39%) が 2 項目以上のカタトニア症状を有していた。カタトニア症候群の診断に関する検討では、Bush Francis Catatonia Screening Instrument ならびに提唱されている DSM-5 判定基準によれば、順に 32% と 12.7% がカタトニアを有していると判定された。カタトニア症候群を伴うせん妄は、女性に多く、入院前にせん妄を発症した患者に多かった。せん妄のサブタイプの中では、低活動型（活動減少型）せん妄 (hypoactive delirium) にカタトニア症候群を伴うことが多かった。【結論】本研究は、せん妄患者の多くにカタトニア症状があり、かなり多くがカタトニア症候群を有することを示唆するものである。この高い有症率のため、せん妄とカタトニアの重複診断が下されることもあり得る。カタトニアが活動性によって分類される特定のサブタイプのせん妄に関連していることは、せん妄の既存のサブタイプの拡張、あるいは修正を促すものであろう。

(文責：布村明彦 PCN 編集委員)

(日本国内からの投稿)

PCN Frontier Review

1. Neurobiological model of obsessive-compulsive disorder: Evidence from recent neuropsychological and neuroimaging findings

T. Nakao, K. Okada and S. Kanba

OCD の神経生物学的モデル：最近の神経心理および神経画像の知見に基づくエビデンス

強迫性障害 (Obsessive-compulsive disorder: OCD) は従来ほとんどの治療介入に抵抗性の疾患と考えられてきた。しかし現在では SSRI や行動療法が高い有効性を示す豊富な証拠がある。さらに近年の神経生物学的研究は、OCD における臨床症状、認知機能、そして脳機能に密接なつながりがあることを示している。

PET や SPECT, functional MRI (fMRI) を用いた多数の先行脳画像研究が、OCD 患者の前頭葉皮質と皮質下領域における異常な高活性を同定している。また多くの研究が症状賦活時におけるこれらの領域の過剰賦活を報告している。さらに、これらの過活性は SSRI や行動療法が奏功した際には減弱する。これらの知見に基づき、眼窩前頭-線条体モデルが OCD の症状表出を媒介する異常な神経回路として仮定された。一方、これまでの神経心理学的研究は OCD における遂行機能、注意、非言語的記憶といった認知機能の障害を報告している。さらに最近の fMRI 研究は撮像中に神経心理課題を用いることにより、神経心理障害と臨床症状の相関を明らかにしている。fMRI 研究による証左は、OCD の病態に背外側前頭前野や後方脳領域を含むより広汎な脳領域が関与していることを示している。われわれはさらに、OCD は異種性を有しており、症状次元のような臨床的因子と関連した、いくつかの異なる神経システムをもつことを考慮すべきである。このレビューでは OCD に関する近年の神経心理学的および神経画像研究について概説する。さらに、近年発展したいくつかの神経生物学的モデルについても記述する。この領域における先進的な知見は OCD の従来の生物学的モデルをアップデートするであろう。

Regular Article

1. Effects of maternal depressive symptomatology during pregnancy and the postpartum period on infant-mother attachment

H. Ohoka, T. Koide, S. Goto, S. Murase, A. Kanai, T. Masuda, B. Aleksic, N. Ishikawa, K. Furumura and N. Ozaki

妊娠中、産後期の母子愛着における母親のうつ状態の影響

【目的】産褥期うつ病は子どもの認知、感情の発達において長期的な影響を呈するが、妊婦と子の病理の関連は明確に確認されてはいない。そこで Bonding (愛着) 障害と妊娠期および産後の母親の気分との関連を明らかにするために、自己記入式質問紙を用いた前向き研究を実施した。【方法】対象は質問紙すべてに記入した 389 名の女性である。参加者には妊娠期と産後期に 4 回、Edinburgh Postnatal Depression Scale

(EPDS) と、Mother-to-Infant Bonding Scale (MIB) を記入することが求められた。【結果】それぞれの記入時期に EPDS と MIB の間に弱から中程度の相関 ($r = 0.14 \sim 0.39$) がみられた。低い気分状態の女性は、強い愛着障害をもつ傾向がみられた。さらに、母と子の間の愛着の結果は、EPDS で測定される母親の気分と

密接に関連していた。【結語】愛着と母親のうつ状態の経過には様々なパターンが存在することが明らかとなった。母親の気分と母子の愛着形成に基づいたこれらサブタイプは、母親のうつ状態の経過を考慮に入れて愛着障害の分析が行われるべきであることを示唆している。
